

# 『述語制言語の日本文化』

LIBRARY ICHIKO 127 SUMMER 2015 7月31日 発売予定

日本語に主語が無いという一部西欧規準からの判定ではなく、英仏独などの西欧語には主語があるが、「日本語は述語言語である」という考え方が概念空間をしつかりもたないと、日本語だけではなく日本文化の理解にいつまでもたどりつかない。しかも、主客分離は、西欧でさえ近代現象であって、ものごとの本質は、主客非分離の述語制にある。この普遍本質の明示に日本語・日本文化は、世界寄与しようというのだ。本誌でかつて特集した「金谷武洋の日本語論」は、三上章、佐久間鼎、そして松下大三郎の日本語論を読み解いていくうえで、の規準であるが、そこにこの春、藤井貞和氏による『文法的詩学その動態』(笠間書院)が刊行され、「助動辞」「助辞」の古典をふまえた文法体系が提示されたゆえ、さっそくお話を伺うことにした。そして日本語には、どうしても漢字がはいる、その漢字のあり方の意味を、齋藤希史氏からうかがうことができた。漢字研究の到達地帯が明示された『漢字世界の地平』。私たちにとって文字とは何か(新潮選書)を主に語っていた。この三氏から、「日本語」を見直していくと、わたしたちは日本人として日本語をどう考えていったらいいかの正確な方向性が定まりうる。ようやく日本語とはいかなる言語であるのかへの探究が、まっとうにはじまってきたといえる。実は、それほど遅れているのだが、西欧言語論への不正確な認識と日本語への恣意的すぎる探究がなされてきただけの次元が、言語哲学の不在からうみだされてきたのだ。日本哲学者たちは、日本語言語へのあまりの粗末な無理解さから、日本を考えていたにすぎない。日本語をしっかりと自覚して、その述語言語概念空間と主語制概念空間とを識別して、双方を対象化しうる位置にたつことだ。倫理や責任は、さらに科学や技術や経済も環境も、そこからしか行使されない。日本語は、実に高度な言語体系である、論理性がいまいる言語などではない、非常に論理的な言語である。

▼【対談】藤井貞和・山本哲士「藤井貞和『文法的詩学』をめぐる」▼齋藤希史インタビュー「漢字と日本語の『文字』を読むということ」▼文化論を超えて▼金谷武洋「述語言語の日本語文法を主語言語の英文法で記述する愚行」▼山本哲士「主語」という誤認の概念空間「述語制の概念空間へ」▼山崎正純「漱石の『心』私論」ゲームと贖罪▼「自著を語る」大森雅子『時空間を打破する ミハイル・ブルガーコフ論』▼カラー特集「江戸扇子」(文化技術)

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇一五年十月末発行予定



A5 変形 128頁 定価(本体 1,500円+税)

【監修・アートディレクター】  
河北秀也(かわきた ひでや)  
1947年生まれ。日本ベリールアートセンター主宰。  
著書に『デザイン原論』など。  
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】  
山本哲士(やまもと てつじ)  
1948年生まれ。信州大学教授をへて現在東京芸大客員教授。  
政治社会学、ホスピタリティ環境学。  
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『<もの>の日本心性』ほか多数。

ご注文は「RCC」へ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

述語制言語の日本文化

LIBRARY ICHIKO 127 SUMMER 2015 1500円(税別)

ISBN 978-4-938710-95-8 C1010 ¥1500E

書店名

部数